

〈図書紹介〉

坂井祐円著『お坊さんでスクールカウンセラー』

山内清郎

私事になるが最近にあつた出来事を書きとめることから本書の図書紹介を始めたい。五歳になつた娘が風呂に入つていて、普段の陽気な様子とはうつてかわって、何の前ぶれもなく本氣で泣きだした。涙をぽろぼろと流し、まさに号泣だつた。一緒に風呂に入つていたわたしはあまりの泣きっぷりに面食らい、うろたえた。何か怪我でもしたのではないかと心配もした。ようやく、しゃべれるぐらいに落ち着いたところで彼女はひと言「死ぬのがこわいの」と泣きながらふり絞るように言つた。

坂井祐円氏の『お坊さんでスクールカウンセラー』（法藏館、二〇一八年）の紹介を執筆中でなければ、いずれは何事もなかつたかのように忘れてしまつていたはずの娘の日常の一エピソードがこの時は強くわたしの印象に残つた。『お坊さんでスクールカウンセラー』は、このように日常の何気ない生活の中に突如、そして場合によつては激しく侵入してくる「死」「死後の世界」を繊細な筆致で描いた、優しく、不思議な書物である。

その雰囲気の一端を感じてもらうためにも、ここにまず目次を示すことで、本書の紹介をしよう。

- 第1章 死と誕生をめぐる話  
 第2章 いのちより大切なもの  
 第3章 傍らにいて、ともに悲しむ  
 第4章 世界は輝きに満ちている  
 第5章 不登校と幽霊  
 第6章 死者の夢  
 第7章 読経の声が響き渡る  
 エピローグ  
 あとがき

目次の各章の横には、それぞれの章でのエピソードを象徴する人物の語りの言葉が書き添えられている。例えば、第4章には、「もしかしたら、私はあの子の面影ばかりを探していたのかもしれません」／息子を事故で喪った母が、生きる希望を見出すまで。第6章には、「お母さん、心配しなくていいよ。きっと、うまくいくからね」／夢に現れたのは、一五年前に亡くなった息子だったのか!?。これらの言葉が書き添えられるといった具合である。

あとがきによれば本書は氏の前著『仏教からケアを考える』（法藏館、二〇一五年）の続編にあたり、『仏教からケアを考える』が専門向きで理論編、「お坊さんでスクールカウンセラー」が一般向きで実践編といったんは分類できるであろうということである。しかしだからといって本書が前著の理論を例証する、具体的な事例を列記した事例集・エピソード集というように簡単に割り切れるものではない。それはいつたいどういうことか。このあたりのことをこの図書紹介での中心的テーマにしたいと思う。

坂井氏がカウンセラーでありお坊さん（真宗大谷派僧侶）であることは、本書を手に取られた方にすぐにわかる。

本書は、氏がこれまでに経てこられたさまざまな経験（とはいっても本人が述べられているように守秘義務のため一つひとつエピソードは物語化・虚構化されたものである。しかしながらその経験自体には強い真実性が感じられる）を中心で編まれた書物である。

緩和ケア病棟での談話ボランティアで出会った看護学生との断続的な対話。彼女は急性骨髓性白血病であった。（第2章）

教育委員会からの「緊急支援」の要請の電話。みずからいのちを絶つた生徒のことを知らせる月曜日、生徒や教員に動揺がはしる、そんな危機状態に陥った学校を立て直すための支援の場に坂井氏は呼ばれたのだった。（第3章）

下校中、スリップしたトラックが歩道につっこむという不幸な事故で息子を失った母親があることを機縁にスクールカウンセラーの坂井氏を学校の相談室に訪ねてきた。息子が亡くなつた日から時が止まつたかのように生きてきた彼女。（第4章）

不登校の子どもを抱える母親との話。初回ひと通り話をしたところで唐突に自分には幽霊が見えるということが語り出された。（第5章）

具体的に坂井氏のカウンセリング場面の雰囲気を知つてもらうために、ここでは第5章の幽霊が見えるという母親との間のカウンセリングの簡単な経緯を記そう。

息子は現在中学一年生。小学校の運動会練習で少々こじれた一件があり、それ以来、自分の部屋から出ようとしない（語弊のある言い方になるかもしれないが）不登校としてごくありがちな経過を経てきた。ありがちだからといって解決が簡単ということはもちろんなく、筋金入りの不登校状態で、母親としても半ばあきらめた気持ちで、スクールカウンセラーに対してもそれほど期待を抱くことなく来談してきた。

細かな経緯は、本書を直接に読んでもらうほかないのだが、母親と舅の幽霊との（一見怪しげな靈能者之力添えも

得ながら) 和解(?)が進むのと並行して、家庭にもよい変化が生じ、息子もこれまでのこじれが嘘のように学校へ向かうようになった。

注目したいのは坂井氏が母親と初めて対面した場面である。「〔前略〕ちょうど私の足元のあたりに、お坊さんみたいな人が立っているのが見えたんです」／唐突だったのと、『うん?』と一瞬思ったが、幽霊の話だな、とすぐにピントきた。こちらの反応を試しているようにも感じられた」(一〇三頁)。母親は確かに試しているのだろう。そうして試しに対する坂井氏の基本的スタンスは次の通りである。「人というのは、わからないことをわからぬままにしておくと、どうも不安になる傾向がある。そのため、理性にかなうように物事をはからつて納得のいく答えが見つかること、なんだか安心するのである。とはいえ、いくら検証してみたところで、わからないことはやっぱりある。幽霊というのも、そういうことの一つだろう。／むしろ、わからないことには、なるべく謙虚な姿勢で向き合つたほうがよい、というのが私の考え方である」(一〇一頁)。

こういうスタンスは本書の全編を通してさまざまに形を変えて登場する。息子を失った母親とのカウンセリングでの一場面。「いや、思い出とかではなくて、……何で言うか、私は息子と同じ世界にいるんです」／彼女の言いたいことがわからず、戸惑つてしまつた」(八五頁)。戸惑いつつも、話をそらすことも、逃げることもなくある種の覚悟を決めて彼女の傍らにいよう、彼女に向き合おう、耳を傾けようとする坂井氏。自分の娘の「死ぬのがこわいの」の台詞に怖じ気づき、つい話をそらそらとした評者とは対極的である。

「やわらかい、ゆるやかな関わりを続けていくと、まるで仏さまの御手の中に包まれるかのように、そういう感覚へと自然と導かれていくのである。／こういうカウンセリングの見方を、私に教えてくれたのは、やはり仏教であった」(一八五頁)。この言葉を読み、一つの疑問が思い浮かぶ。坂井氏の根っこに、仏教が理論的な支柱としてあるから、氏特有のある意味で腹のすわつた覚悟の決まつたカウンセリングが実践されるのか。あるいは、坂井氏のパーソナリティがもともと、わからないものへの謙虚さ、それと向き合う覚悟をもつていてから、坂井氏の中で仏教とカウンセリングとが独特的の融合をしたのか。おそらくその両方というものが実際のところなのだろう。

しかし、エピローグで語られる「祖母の死の原風景」、第3章に挿入される「若き坂井氏自身の死への不安と西光義<sup>ショウ</sup>先生との出会い」を繰り返し読むにつけ、もはや前著の『仏教からケアを考える』でさえ、こうした原風景・原体験を抱える坂井氏が実存的にもがき生きるための必然的なマイルストーンであつたかのように感じられるようになつた。

『仏教からケアを考える』がメインのテキストであり『お坊さんでスクールカウンセラー』がサブテキストであると受け取るのが一般的な読み方だろう。だが、今回本書を繰り返し読み返すなかで、むしろ『仏教からケアを考える』の方こそが、本書の理解を深めるためのサブテキストであるかのような錯覚さえおこつた。評者は、その観点から『仏教からケアを考える』を読み直したいと考えているところである。

最後に、本学会、日本仏教教育学会と深く関連することで坂井氏にうかがつてみたいことがひとつある。坂井氏が説明をされる際には、科学／非科学(例、神話・宗教・迷信)、「生」の問題・現場／「死」の問題・現場、といった対比によつて述べ、そして前者を担うのが「教育」であり、後者は「仏教」であるかのように位置づけられことが多いよう思う。

ところが、坂井氏自身も頻繁に用いられる「死者とともに生きる」「死者を供養する」「死者が傍らにいて、ともに悲しんでくれる」(そもそもしかすると比較にならないほど些細な出来事かもしれないが、評者の娘の「死ぬのがこわいの」といった表現、「死」「死後の世界」への日常への侵入は、それほど明確に対立的なものなのだろうか。むしろ、こうした対比的な図式は説明上必要なことであることを評者は認めつつも、この図式の存在がかえつて坂井氏の見ている世界を理解するのを邪魔している側面があるという懸念が評者にはある。「生」の現場と「死」の現場、「教育」と「仏

教』はもつと柔軟に、また突如、相互に嵌入するような世界（生の世界に侵入する死、死の世界に侵入する生）なのかもしないということも、本書を読んだ後の素直な読後感であった。

法藏館、二〇一八年四月二〇日発行、四六版、一九〇頁、一八〇〇円（税別）

（立命館大学准教授）